

2022 年 1 月 27 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

産後 1 か月の母親の身体症状と日常生活動作の実態調査

A Fact-Finding Survey of Postpartum Pain Level and
Activities of Daily Living at One-Month Postpartum

20MW015

福元明日香

要旨

【目的】産後 1 か月時点での母親の身体症状として痛み注目し、身体症状と日常生活動作の困難の実態、および身体症状と日常生活動作の困難に影響する要因を探索すること。

【方法】自己記入式質問紙による量的記述的研究。対象は経膈分娩から 1 か月が経過した母親である。産後 1 か月時点までの身体症状と日常生活動作の困難、及びこれらに関連する妊娠・分娩・産褥各期のイベントを文献検討により抽出し、質問紙を作成した。項目ごとに産後 1 か月時点での各身体症状・日常生活動作の困難との関連をカイ二乗検定、スピアマンの順位相関係数により確認した。産後 1 か月の痛みの有無と日常生活動作の困難の有無をそれぞれ目的変数としてロジスティック回帰分析を行い、関連因子を探索した。聖路加国際大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号: 21-A052)。

【結果】回収数 125 件のうち、初産婦 80 名、経産婦 36 名の合計 116 名を分析対象とした(有効回答率 92.8%)。身体症状も日常生活動作の困難も経時的に有痛者数および困難者数は減少するが、産後 2 週間までは痛みが持続するものが多かった。産後 1 か月時点の身体症状で最も多いのは腰背部痛であり、次いで会陰部痛であった。日常生活動作では、産後 1 か月時点で約 4 人に 1 人は何かしら困難感を自覚していた。身体症状では、妊娠期と産後 1 か月時点の身体症状にいずれも同一部位で正の関連がみられ、属性や分娩転帰などの他の影響を考慮しても妊娠期の痛みの程度は産後 1 か月時点の痛み大きく影響していた。会陰切開は複数個所の痛みに影響しており、腰痛に対してオッズ比(OR)4.06 [95%信頼区間(95%CI)=1.26-13.06]、統計学的に有意ではないが座骨痛には OR3.34 [95%CI=0.93-11.94]、会陰部痛には OR2.87 [95%CI=0.77-10.71] であった。日常生活動作においても会陰切開は産後 1 か月時点での影響が大きく、有意ではないが座ったり立ったりする動作に対して OR6.19 [95%CI=0.72-53.23]、円座なしで座る動作には OR3.78 [95%CI=0.78-18.45] であった。また、妊娠期の貧血は最も多くの動作に影響があり、寝がえりをうつ動作に対して OR3.66 [95%CI=1.20-11.17]、赤ちゃんを抱きあげる動作では OR2.54 [95%CI=1.09-5.89]、立位のまま赤ちゃんをしばらく抱く動作では OR2.47 [95%CI=1.00-6.08]、沐浴では OR2.28 [95%CI=0.95-5.51] であった。腰背部痛、会陰部痛も家事や動く動作などに正の関連がみられた。

【結論】貧血や腰背部痛などの身体症状は妊娠期のマイナートラブルとして扱われやすいが、産後の母親の身体症状や日常生活動作に大きく影響を及ぼしており、妊娠期より予防的に介入し、産前産後に母親自身が正しくケアできるように支援していく必要がある。